

# キリスト教神学における歴史認識

## —ラインホルド・ニーバーによる近代文化についての見解—

### Views on History in Christian Theology: Reinhold Niebuhr's Perspective about Modern Culture

佐久間 重  
Atsushi SAKUMA

本論は、ラインホルド・ニーバーが彼の著作『人間の本性と運命』の中で展開しているキリスト者としての近代文化の捉え方を詳述したものである。ニーバーの解釈を見ると、ルネサンスや宗教改革についての一般的な解釈とは異なった、キリスト者の解釈が鮮明になる。ニーバーは、宗教改革の思想に対してルネサンスの思想が圧倒する形で近代文化が成立したが、近代文化の中には中世以来の聖書的な視点が連続として続いていることを明らかにしている。つまり、精神運動としてのルネサンスは、人間の無限の可能性を肯定し、歴史に意味があるという概念を再発見することであったが、個人や歴史の成就というルネサンスの概念は、古典思想や中世のカトリックの合理主義に遡ることが出来る。これは、カトリック的神秘主義や修道院の完全さを求める姿勢の中に表されていた。こうした思想がプロテスタントの敬虔主義や近代の進歩思想の基礎となった。また、近代の進歩思想には、聖書の終末論にある希望が大きな影響を与えたが、20世紀に入り進歩思想の限界が明らかになり、思想的混迷が生じており、これを打破するにはルネサンス思想と宗教改革の思想を弁証法的に再検討する必要がある、とニーバーは述べている。

This paper deals with the Christian views on modern culture according to Reinhold Niebuhr's description about them in his famous book, *The Nature and Destiny of Man*. Niebuhr's views identify Christian interpretation of the Renaissance and the Reformation, which is different from the common understanding of them. Niebuhr makes it clear that modern culture was realized by the remarkable triumph of the Renaissance over the Reformation, but that the Biblical perspectives are retained even in modern culture. The Renaissance is understood as a spiritual movement affirming the limitless possibilities of human existence and rediscovering the sense of a meaningful history. The Renaissance idea can be traced back into the classical conceptions and Catholic rationalism. They were expressed in the perfectionism of Catholic mysticism and monasticism and became the basis of the Protestant pietism and the modern thoughts vindicating human progress, which were supported by the hope of Christian eschatology. In the 20<sup>th</sup> Century people were confronted with the tragic realities of modern thoughts and exposed to the intellectual turmoil. To overcome this situation Niebuhr points out the importance of dialectically reconsidering the Renaissance and the Reformation.

キーワード：近代文化、ラインホルド・ニーバー、完全主義、ルネサンス、宗教改革  
modern culture, Reinhold Niebuhr, perfectionism, Renaissance, Reformation

## I. はじめに

本論では、これまでに引き続きラインホルド・ニーバーの思想を取り上げ、彼の歴史の見方、つまりキリスト教神学者として歴史をどのように解釈しているかを紹介することにする。<sup>注1)</sup> ニーバーは近代文化を取り上げ、それがどのように形成されたかを解釈した。ここでは、中世、ルネサンス、宗教改革、近代に至る思想的変遷についてのニーバーの見解を見て行くことにする。以下ではラインホルド・ニーバーの論述に沿って詳しく紹介することにする。<sup>注2)</sup>

## II. 近代文化における人間の運命についての議論

### 1. 人間の運命についての近代文化の解釈

人間の可能性と限界についての解釈では、ルネサンスの思想が宗教改革の見解を凌駕し、近代文化が形成された、と言うのがニーバーの主張である。宗教改革後に生まれた多くのプロテスタントのセクトも宗教改革の見解を継承しなかった。近代のプロテスタンティズムは、宗教改革の中核を成した、マルティン・ルターの「信仰による義」と言う見方に対して、カトリックや世俗の文化にも増して無関心になった。カトリックは、信仰による義を自覚することを放棄することはなかったし、世俗の文化も歴史的 가능성이挫折することを認識する健全な常識を持っていて、時には、その問題に対して、信仰による義の世俗版のような見方を提示した。一方、近代のリベラルなプロテスタンティズムは、幻想的な歴史的希望に埋没して行った。

リベラルなプロテスタンティズムは、人間の運命についての議論では、宗教改革の思想ではなく、ルネサンスの思想に依存したが、英国国教会は、ルネサンスにも宗教改革も与さない立場であった、としてニーバーはプロテスタントの諸セクトの見解の特徴を浮かび上がらせている。英国国教会の精神的傾向は、カトリックとルネサンス直前期のリベラリズムの中間であった。古くからのイギリスの大学での古典研究の重視と、イギリスの牧師が神学よりも大学教育に傾倒したことが、英国国教会の思想に古典の要素が多く入り込む結果となった。そのため、英国国教会では、聖書の見方と古典の見方が対立する問題が生じた場合に

は、それを曖昧にする傾向が出た。

英国国教会内の神学議論は、アウグスティヌス(354～430)以前の神学と、アウグスティヌス以後のカトリックの神学との間の議論に集約される。これら両方の神学には、強い完全主義の傾向があり、前者は、近代のリベラリズムと類似した思想を持っていた。5世紀初頭に人間の自由意志の尊重を説いたイギリスの修道士のペラギウス(354～440)の思想を滲ませる国教会の思想が世俗的完全主義に変容しなかったのは、国教会の祈祷書とキリスト教の歴史の影響である。祈祷書は宗教改革の思想を受け継いだ内容となっている。英国国教会思想の悪しき側面には、リベラルな道義主義と伝統的な敬虔主義があり、良き側面には恵みについてのあらゆる見方を統合しようとしたことがあった。

ニーバーはここで、ルネサンスと宗教改革との間の議論の再検討のあり方を取り上げるが、その再検討の多くは、ルネサンスの思想はこれまで考えられていた程には良いものでもなく、宗教改革の見方はそれ程には悪くはなかったことを明らかにする傾向がある、としている。この再検討は、スイスの神学者であるカール・バルト(1886～1968)の「弁証法神学」の興隆と共に始められた。次に、バルト神学に対するニーバーの批判的見解が展開される。この神学は、第一次大戦の経験により近代文化への反動として生まれたが、ニーバーは、この神学の問題点が、ルネサンスは全く間違っていて、宗教改革は全く正しいとしていることにある、としている。さらに宗教改革を強調しすぎたために、宗教改革の思想の中にあつた罪の浄化や人生の成就という概念をも押さえ込まれてしまった。また、ルネサンスを余りにも否定してしまつたために、ルネサンスの中にあつた誤つた見方を明らかに出来なくなつてしまった。

そこで、ニーバーは、彼独自の視点からルネサンスと宗教改革を議論して行く。まず、人生や歴史に関するルネサンスの解釈の中にあるキリスト教的な面や正しい点を明らかにする。

## 2. ルネサンスの意味

ニーバーは、精神運動としてのルネサンスを、人間の無限の可能性を肯定し、歴史に意味があるという概念を再発見すること、として位置づける。初期のイタリア・ルネサンス、デカルト的合理主義、フランスの啓蒙思想、リベラルな進歩思想、キリスト教諸教派に見られる完全主義などの中に一貫した原則がある。それは、人生が成就されるという考えであり、古典思想が持っていた人間の能力への信頼と、聖書の終末論にある歴史の成就への希望という二つの異なった源から発したものである。ニーバーは、この二つの源がルネサンスという言葉が持つ二つの意味を決定している、としている。一つの意味は、学問全般、特に古典的学問の再生のことであり、もう一つは、地球や人間社会の再生のことであり、これは、キリスト教の終末論にある希望によってもたらされたものである。

個人や歴史の成就というルネサンスの概念は、中世のカトリックの時代に遡ることが出来る。また、ルネサンスの個人の無限の可能性を強調する考え方は、古典思想から生まれたものであるが、カトリックが持っていた合理主義の中でも継承されていたものであった。これは、カトリック的神秘主義や修道院の完全さを求める姿勢の中に表されている。カトリック的神秘主義の流れは、プロテスタントの敬虔主義へと続いて行くことになる。歴史の成就というルネサンスの考えは、フランチェスコ修道会の急進的運動から派生していた。13世紀に出来たフランチェスコ派の敬虔主義は、修道院の中で人間や信仰が完全なものになると言う修道院運動の完全主義の最後のものである。

個人の完全さを求める考え方は、聖書の完全主義から派生していた。地上に神の王国を樹立するという、意味を持った歴史という概念は、12世紀のカトリックの神秘主義者で南イタリア生まれのフィオーレのヨアキム(1135~1202)が行った黙示録解釈と聖フランチェスコ(1181~1226)の説いた罪の浄化という考えの統合の結果である。ヨアキムは、カトリックの教えと神の王国とを同一視することから生じていた、歴史を静的に捉える態度に反対した中世では最初の思想家として考えられている。彼によると、世界の歴史は、父なる時代と子の時代と聖霊の時代の三つに分けられ、子の時代が現在で、それが内的に成就される聖霊の時代に向かっていることになっている。

フランチェスコ派の急進派の人達は、ヨアキムの黙示録的希望は、フランチェスコ派の修道院主義がもた

らす理想的な秩序の中で実現されると主張した。ニーバーは、彼らを精神主義者と見なし、その思想は、非歴史的な神秘主義から出て来た歴史への意識である、としている。これは、これまで古典思想や中世の教義によって覆い隠されていた聖書の終末思想が表面化したものである。歴史過程の中に救済の力を確信する近代の考えは、フランチェスコ派の精神主義者の思想にその萌芽があった。フランチェスコ派の思想が、個人の完全さへの主張と歴史的成就への希望の両方を、ルネサンスへと橋渡しした。ここでニーバーは、フランチェスコ派の中世最高の神学者である聖ボナヴェンチュラ(1221~1274)が前者を、イギリスのカトリック司祭であるロジャー・ベーコン(1214~1294)が後者をルネサンスへと橋渡しした、として二人の考え方を対比する。

聖ボナヴェンチュラは、「完全な愛で神を愛する人は、神に変えられる」と述べたが、この言葉は、ルネサンス期でも取り上げられた。ロジャー・ベーコンは、学習することを奨励したことで、「最初の近代人」と言われることが多い。彼が学問を奨励したことは、偽キリストの危険に対処する武器を人間に提供する最善の手段として学問を正当化したことであるが、これは余り知られていない。ここで、フランチェスコ派の終末論と学問への熱情が、ベーコンの思想の中で統合される。キリスト教の終末論的前提があることにより、ルネサンスは歴史の成就という考えを持つことになる。ダンテやペトラルカや後のルネサンスの思想家が描く理想郷の中には新しいものと古いものが混ざり合っていることになる。

次にニーバーは、キリスト教の終末論の概念を近代の進歩の思想へと変質させた歴史理論の展開を概観する。この理論発展の中心となったのは、理性、知識、自然の合理的な征服などへの新たな確信であった。科学への熱情が、歴史的な楽観主義へと結び付くのである。理性への確信は、「内在するロゴス」という原理を基礎に持っていた。この原理の中では、人は歴史を越えることを考えることはせず、歴史の中で作用し、混乱を理性の下に置くことが出来るとしてこの原理を捉えるようになった。この考え方は、ドイツの哲学者のフィヒテ(1762~1814)やヘーゲル(1770~1831)の歴史観に反映されていて、フィヒテは、歴史は合理的な自由で無限に近づくものと捉え、ヘーゲルは、永遠の精神についての自己意識を次第に発展させるものとして歴史を捉えた。ニーバーは、18世紀の啓蒙思想を

ルネサンスの第二章と位置付け、その中では、歴史的な希望は、自然を合理的に征服することが物理的な幸福を増進させると考えられるようになった、としている。

近代に入り、様々な哲学が発展したが、内在するロゴスへの確信は一貫したものとなった。19世紀のダーウィン主義は、歴史的な楽観主義を表していたが、これにもロゴスの原理が作用していた。適者生存の法則は、歴史の悲劇的な混乱を歴史の進歩の手段に変えて行く調和の力と考えられた。20世紀に入っても、進歩の原理に大きな変更が加えられることはなかった。ニーバーは、進歩の思想とキリスト教の終末論との関係を、歴史を静的なものとしてではなく、動的なものとして捉えている点に集約している。反面、両者の違いは、次の二点に出ている、としている。その第一は、ルネサンスでは人生の成就が神の恵みとは無関係で捉えられていることである。自然や理性の法則が、神の摂理の代わりをなすものとされた。その第二は、ルネサンスでは歴史の進展は善きことの発展と見なされたが、人間存在の可能性が悪の可能性も表すことは認識されていなかったことである。キリスト教の終末論では、歴史の終わりは審判と成就の両方を表すが、近代の概念では歴史の終わりを成就としてしか捉えられていない。近代の概念では、歴史の自然条件の中で無条件の善が実現されることが期待されていて、歴史的存在が永遠と対立していると捉えられていない。キリスト教の中で、こうした人生の悲劇的側面を表しているのが、「最後の審判」という教義である。

歴史と神性との間の乖離の原因としてニーバーが指摘しているのは、個人や集団による歴史の意味についての誤った解釈である。多くの文化や哲学の中で、自己の限界を理解できないことは、自己を最終のものと見なす仮定をもたらす。近代における歴史の解釈は、この傾向を示している。近代の人達は、自分の文化や哲学と人生の成就を同一視する過ちを犯して来た。どんな哲学でもこの過ちを完全に逃れることは出来ないと、この過ちが犯される傾向があることを理解する哲学や神学を持つことは可能である。1689年にフランスの作家シャルル・ペロー（1628～1703）は、「我々の時代は完全さの頂点に達した」と述べたが、将来の世代を羨望の眼差しで見ると必要のないことは現世代にとっては快いものになる。近代の歴史哲学は、未来の事態を神の代理をするものとして見なし、神の審判の役割を果たすものとした。ただ、未来は現在の延長に

すぎないと見なされ、現在の業績とは矛盾する歴史的発展は予期されなかった。ニーバーは、近代の歴史解釈に見られる共通の過ちとして、歴史的進歩についての余りにも単純な考え方を指摘する。近代の解釈が歴史を動的なものに見なしているのは正しいとしても、それを余りにも単純に捉えるところに間違いがある。近代の解釈では、歴史が混乱を引き起こすことなく前進することは出来ないと言うことを認めなかった。

### Ⅲ. プロテスタント諸セクトの思想とルネサンス

プロテスタント諸セクトの中には、歴史に対してルネサンス的な基本思想を持っているものがあつた。宗教改革と同時期に生まれたプロテスタント諸セクトには、宗教改革とは対照的な理由からカトリックに対して批判的なものがあつた。そうしたセクトは、カトリックの説く完全主義には反対していなく、批判の対象はカトリックが余りにも簡単に罪人に神の恵みを与えることになる洗礼に向けられた。

プロテスタント諸セクトは、ルネサンスよりも中世の神秘主義から思想的な基盤を受け継ぎ、人生や歴史の成就については共通の考え方を持っていた。諸セクトの思想を分析するに当たり、ニーバーは、次の二つのタイプに分類する。(i) 敬虔主義的セクトに見られる個人の人生の完成を強く意識することと、(ii) 再洗礼派(Anabaptist)や社会的に急進的なセクトに見られる歴史の完成への強い意識である。

#### (i) 個人の人生の完成を説くセクト

敬虔主義的セクトは、神秘主義と聖書主義とを融合している。神秘主義を強調する考え方の中では、救済(redemption)とは黙考する中で出てくる生活の本来的な統合の回復である、と捉えられた。聖書主義を強調する考え方の中では、改宗は恵みによる、と捉えられた。この考え方は、福音主義的セクトの中で顕著であり、改宗は個人の内的力の発達としてよりも、聖霊による罪深い自己の打破と見なされた。こうした諸セクトに見られる完全主義への傾倒は、聖書の中にある罪の浄化(sanctification)と裁可(justification)という逆説的教えを台無しにする危険をはらんでいる。ほとんどのセクトに見られる完全主義の立場に立つと、カトリックやプロテスタント正統派が完全さに到達出来ないのは、キリスト者の人生の目標として完全さを定義しないからだ、と考えられた。

ニーバーは、諸セクトの教義の基礎になっている人

間の本性についての概念を分析し、これらの概念は本質的には神秘的で合理主義的な特徴を持ち、人間の本性に普遍的、神秘的要素を認めていることを明らかにしている。この概念では、人間の罪が自由な精神の結果であるという逆説は理解出来ない。キリスト教の教義に忠実に従えば、こうした間違いは、人間の中にある神のイメージを神自体であると誤解することから生じることが解る。敬虔主義の中では、「内的光」(inner light)と「隠れた種子」(hidden seed)という概念が取り上げられているが、こうした概念に従えば、人間生活の神的要素は意識の最も深いレベルで見出されることになる。これが、時により神秘的な信仰になったり、合理的な態度になったりする。

敬虔派のセクトがとった救済への方法としてニーバーが指摘しているものが、「内的性」(introversion)という神秘的な戦略的方法である。その一つとして、オランダの敬虔主義者であるコルンヘルトの考え方をニーバーは紹介している。コルンヘルトは、人間は理性を通じて神の言葉を分かち合えると言う思想を持っていた。人間は、外的なものについて持っている知識は少ないが、それを越える確かさで自らの救済を知ることが出来る、とした。クエーカー派を批判したジョン・ノリス(1657~1711)は、内なる光を、聖書的な言葉であると共に合理的な言葉として混ぜ合わせ、次のように定義した。(i)人間には内的光があるので、物事を知ることが出来る。(ii)人間は光そのものではない。(iii)神が人間の光である。こうした混同は、クエーカー教徒の思想にも度々表れていて、「キリスト」と「聖霊」が聖書的な意味なのか、神秘的意味なのかを明らかにしていない。例えば、バークレイ(1648~1690)は、人間の中には種があると延べて、この種により人間は、父であり、子であり、神としての聖霊と言う目に見えない原理を理解出来るようになる、とした。

キリスト教の様々なセクトの概念のうち、メソジスト派の創立者であるジョン・ウェズレイ(1703~1791)の考え方には、最も多くの聖書的な要素が含まれている。彼は、救済は人間の有限性からではなく、罪からなされなければならない、その過程を黙考ではなく、生活の面で捉えた。彼は、裁可(justification)をアウグスティヌスが使った意味で解釈し、過去の罪への許しとした。ニーバーは、ウェズレイと、ドイツ敬虔派の一つであるモラヴィア派のジンゼンドルフ(1700~1760)との間で行われた裁可(justification)と

罪の浄化(sanctification)についての議論を紹介し、両者の考え方の違いを明らかにしている。その議論の中で、宗教改革の思想の影響を受けたジンゼンドルフは、人生における成就を認めないことを主張した。一方、ウェズレイは、キリストの精神がキリスト者の中に成就をもたらすとした。この議論により、宗教改革の思想と完全主義者の精神性の違いが浮き彫りにされた。ウェズレイは、宗教改革の思想にある反律法主義(antinomianism)に反論していた。彼は、新約聖書には信ずべきと言うただ一つの戒めしかないという説に反対した。宗教改革の思想は、反律法主義を採る傾向があり、多くのセクトはこの反律法主義に反対していることをウェズレイは明らかにした。

ニーバーは、宗教改革の思想にも正しい側面もあり、ウェズレイがこれを間違って攻撃していたことを指摘する。それは、モラヴィア派が罪の浄化とは人間からすべての罪を取り去ることではなく、罪の仕組みを細かく砕くことを意味していると解釈していることである。ウェズレイとジンゼンドルフの議論は、一方がある点では正しく、他の点では間違っていたことを明らかにしていて、ルネサンスと宗教改革との間の議論を集約していた。一方が、福音の道義的な命題を維持しようとするのは正しいが、それを完全に実現出来ると想定することは間違っていることになる。

諸セクトに見られる敬虔主義は、聖書の考え方と神秘主義とを融合したものであるが、ルネサンスから派生した世俗的な精神運動のような形で人生の成就を外在化することはなかった。敬虔主義は、世俗的な理想主義と同じ位に、歴史的存在を曖昧にするような完全主義的主張をした。ニーバーは、敬虔主義が持っていた完全主義の過ちの根源を、世俗の完全主義者の考え方と結びつけている概念の中に求めている。つまり、「隠れた種」や「内なる光」は内在化したキリストのことであり、これは、ルネサンス思想の主流である内在するロゴスに対応している。内在化したキリストは、内在するロゴスよりもより動的に捉えられ、改宗や罪の浄化は、世俗的なロゴスの概念よりもより幅広く人間性を内包するものになる。人間に内在するキリストという考え方は、歴史に内在するロゴスと同様に、歴史と永遠との間の弁証法的関係を否定していて、歴史の中にいる人間の自由が善と悪の両方の可能性を持っていることを認識出来なくした。

## (ii) 終末論 (eschatology) を主張するセクト

宗教改革後の多くのセクトに見られる完全主義への傾倒は、敬虔主義的セクトが説いた個人的な罪の浄化への希望ばかりでなく、再洗礼派や17世紀イギリスのクロムウェルが属した社会的急進派のセクトが示した歴史の完成や完全な社会の実現を求める終末論的な希望の中にも見られた。神が「キリストの王国」を招来させることを期待する、純粋に終末論的、黙示録的セクトもあれば、地上に神の王国を実現するために戦闘的になるセクトもあった。こうした違いがあったが、すべてのセクトに共通しているものとしてニーバーが指摘しているのは、ルネサンスの精神性から出ている人生と歴史の完成への希望である。

敬虔主義的セクトは、「恵み」と「力」を通じた改宗と言う立場を取り、聖書との関連性を明らかにした。他方、終末論的セクトは、歴史過程をキリストと偽キリストとの対立へ向けた動きとして捉えることで、聖書の思想との関連性を明らかにした。16世紀の再洗礼派や17世紀イギリスの「第五君主政」(The Fifth Monarchy) 運動派の思想には黙示録的要素があった。ヨーロッパ大陸のセクトの中には、地上における王国の実現を試みたセクトがあったが、イギリスでは王国の実現は主張されず、その代わり、クロムウェルの主張する民主的、平等主義的運動として結実した。

ニーバーは、こうした展開を捉えて、地上の王国を求めることは良いとしても、それを実現したと主張することは疑わしいことである、と述べている。王国の実現を主張することは、最悪の場合には偏狭主義の基となる神聖さの見せかけを生み出すからである。理論としてのマルクス主義は歴史における潜在的影響力を持つが、それが現実化したスターリン主義は多くの問題点を明らかにした。クロムウェル軍の左派勢力を構成した多くのセクトのほとんどは、終末論を内々に持っていた。そうしたセクトのメンバーは、彼らが被った政治的、経済的障害を歴史的悪の最終形態と見なし、それを打破することが社会的完全さを伴った歴史の最終点を招来するという希望を抱いていた。彼らは、歴史が最終的危機に向かって動いているという聖書の終末論を理解していたが、歴史の中に神の王国を求めるといった楽観的歴史観で占められていた。そして、歴史の可能性を超えたところでの「最後の審判」や「最後の成就」という考えを放棄していた。彼らが親近感を持っていたのは、宗教改革ではなく、ルネサンスの思想である。神や聖霊を理性と同一視し、理性を正義

に関する自然法と同一視しようとした。こうした人々の代表として、ニーバーは、ディッガーズ派の指導者であるジェラード・ウィンスタンレイ (1609~1676) を挙げ、あらゆるものを作り、あらゆるものを統治するのが理性であるとする彼の考え方を紹介している。

ウィンスタンレイは、クロムウェルの系統のセクトの中では最も急進的な考え方をしていたが、聖書の概念と近代的な概念との差を示すことになった。彼は、人間の墮落について、個別的愛の高まりを意味するとする聖書の教えを受け入れる一方、罪は所有権の高まりと共に人間社会に入ってくるというマルキスト的な考え方もしていた。彼の考え方によれば、歴史の原初には存在したとされる、資産の共有化の状態に回帰すれば罪は排除できることになっていた。これは、マルクスの歴史観の予見である。クロムウェルの時代の急進的なセクトは、様々な視点から理想的な社会を追い求めた。17世紀の水平派 (Levellers) は、自由主義的社会を、ディッガーズは、より平等な社会を理想とした。こうした点を捉えて、ニーバーは、両者は近代のブルジョアの自由の理念と、プロレタリアートの平等の理念を予見していた、と述べる。

ニーバーは、神の王国はすべての歴史的社會問題を解く鍵であり、兄弟愛が歴史の可能性であるとするセクトの人々の主張を取り上げ、これがキリスト教の福音の一部であることを指摘している。宗教改革後の諸セクトと宗教改革の思想との間の議論は、ルネサンスと宗教改革の思想との間の議論の延長のようなものである。歴史の中で神の意志を成就しようとしたセクトの人々の主張は、キリスト教的であったが、彼らが理解していないキリスト教的人生の解釈が残っていると、以下でニーバーはその説明をする。

多くのセクトは、歴史の様々な現実を神の王国と一致させようとしたが、その考え方が民主主義の実現へと導いた。例えば、カルヴァン派の主張は、民主主義の原理に対して理念的な貢献をした。イギリス国教会は、カトリックと宗教改革の思想を融合させていて、民主主義の原理に貢献をした。他方、ルター派的宗教改革の思想は、社会的反動思想と位置付けられてしまった。急進的なセクトの中には、近代文化が示すことになる理想主義的幻想に傾倒するものがあった。終末論を説くセクトは、歴史の可能性について、社会的視点から急進的な解釈をした点で、ルネサンス思想の本流よりも優れていた。その社会的視点や急進的視点は、聖書の預言から派生したものであったが、この預

言のより深い意味を理解できないでいた。つまり、あらゆる歴史や歴史的業績は、神の審判の下になければならず、歴史の中で達成されると見なされる神の王国は、聖書の中の神の王国とは違うことが理解できなかった。以上のことをまとめて、ニーバーは、多くのセクトは理想的な社会を追究したが、こうした社会は歴史の中では不可能なものである、と述べる。

#### IV. ルネサンスの勝利

宗教改革の思想に対して、ルネサンスの思想が近代において支配的になった理由として、ニーバーは、次のことを指摘している。それは、近代の歴史が持っていた特殊な状況である。つまり、科学の進歩を始めとする近代において達成された様々な業績が、歴史的楽観主義の精神を支えたことである。人間の生活条件が改善され、人間が長年抱えていた問題が解決されたという幻想を生み出した。ブルジョア階級が民主主義的な資本主義社会を樹立するよう見える過程においては、封建主義を打ち破れば、すべての社会的不正もなくなると考えるのが自然なことのように思われた。同様に、16世紀や17世紀に多くの人々が待っていた、民主主義への夢が、19世紀や20世紀になり、厳しい現実と直面すると、有産階級の不正を正せば完全な社会正義を確立できると考える革命思想家や理想主義者が出て来るのも自然なことであった。近代の文化の楽観主義は、若者が自分の体や心が成長すれば自分の人生の成功が約束されると想像しがちなと同じぐらいに自然なことであった。

近代の技術がもたらした業績を目の当たりにすると、この業績の裏側にあるものを見極めることは困難になる。世界的な共同体を作り出し得る技術が、国際的な混乱をも作り出すとすることを認識するのは困難になる。実際に、人間は近代技術を駆使して世界的な共同体を作り出す前に、世界を破壊してしまうような武器を作ってしまった。ニーバーは、今日の人間がおかれている、こうした状況を悲劇的な現実として捉えて、そこから抜け出す方途を探り切れていない、としている。20世紀に生じた様々な事態により、それまでの夢が否定されることになり、現代の文化は憐れな混乱の中に置かれてしまい、新しい人生観や歴史観を打ち出せないでいる。

ニーバーは、このことを簡潔に次のように述べている。現代の人達が新しい人生観や歴史観を持っていないのは、ルネサンスの思想の勝利が完璧であったために、

キリスト教自体が埋没してしまったからである、としている。カトリックの教えは、封建社会を神の裁可を得たものとしていたために、封建社会に対抗して近代の社会的、政治的業績が達成されたという事実によって、人々の信頼を失った。宗教改革の思想は、カトリック程には過去の栄光を追っていないので、信頼を失っていない。しかし、近代の人間は、宗教改革が示した洞察力を受け入れなかった。その理由を知るためには、宗教改革の思想で正しいことが、近代のどのような幻想により、言い換えると、ルネサンス思想のどのような間違いにより凌駕されてしまったかを知る必要がある。近代の人間でも、近代の幻想を追い払うことにより、宗教改革の真理を近代においても認識できるようになる。しかし、宗教改革の思想は、その真理を正しく近代人に提示できていない。その理由として、ニーバーは、宗教改革の思想が、恵みについて聖書が示す逆説的概念や、歴史の成就を否定的に捉えようとする傾向があったことを挙げている。そこで、ニーバーが近代の人に求めていることは、宗教改革で是認されたことを批判的に検討し、近代の人達が陥った幻滅から来る歴史的敗北主義を克服することである。

#### V. おわりに

以上、ラインホルド・ニーバーの『人間の本性と運命』第二巻第六章を中心にして、人間の運命についての解釈がルネサンスを経てどのように変わって行ったかについてのニーバーの見解をまとめてみた。これにより、キリスト教神学、さらには神学者による近代文化の解釈とはどのようなものなのか、特に、ニーバーの神学の特徴はどのようなものなのかの一端は紹介出来たと思う。ニーバーの思想はまだ十分に紹介し切れていないことが多いので、今後も続けて行くつもりである。

#### 注

- 1) 佐久間重, キリスト教神学における歴史認識, —ラインホルド・ニーバーによるカトリック神学についての見解—名古屋文理大学紀要第9号(2009年3月)参照。
- 2) Niebuhr R, *The Nature and Destiny of Man*, II, Charles Scribner's Sons 157-183 (1943) を参照。

